



複雑性腹腔内感染症に対するフルオロキノロン系レジメンとβラクタム系レジメンの有効性と安全性をメタ解析で検討

Int J Antimicrob Agents.2019

複雑性腹腔内感染症の治療において、フルオロキノロン (FQ) 系レジメンは、βラクタム (BL) 系レジメンと有効性や安全性に差は認められないという報告が、「International Journal of Antimicrobial Agents」1月10日オンライン版に掲載された。ただし、モキシフロキサシン単剤療法は、特に複雑性虫垂炎において転帰がやや劣ることが示唆されたという。

米 MedStar ワシントン病院センターの Michail N. Mavros 氏は、成人の複雑性腹腔内感染症患者に対する FQ 系レジメンと BL 系レジメンの有効性及び安全性を比較検討したランダム化比較試験 (RCT) のシステマティックレビューを実施。基準を満たした7件のRCT (対象患者は計4,125例) をメタ解析した。

FQ 系レジメンの内訳は、モキシフロキサシン (4研究)、シプロフロキサシン/メトロニダゾール (3研究) であり、BL系レジメンはセフトリアキソン/メトロニダゾール (3研究)、カルバペネム系 (2研究)、ピペラシリン/タゾバクタム (2研究) であった。主要評価項目は、臨床的に評価可能 (CE) 集団における治療成功と intention-to-treat (ITT) 集団における全死亡とした。また、特定の抗菌薬別、感染源別、単離された細菌別のサブグループ解析も実施した。

その結果、CE 集団では、FQ 系レジメンと BL 系レジメンの間で治療効果に差は認められなかった [リスク比 (RR) 1.00]。また、ITT 集団においては、全死亡率、治療に関連する有害事象、重度の有害事象、有害事象による試験からの脱落の発生率に両レジメン間で差はみられなかった (RR はそれぞれ 1.04、0.97、1.16、1.07)。

また、抗菌薬別のサブグループ解析でも、ほぼ同様の結果が得られたが、モキシフロキサシン単剤療法のみは、BL 系レジメンとの比較において効果がやや劣っていた (RR は CE 集団では 0.96、ITT 集団では 0.94)。感染源別のサブグループ解析では、複雑性虫垂炎においてモキシフロキサシン単剤療法が BL 系レジメンより効果が劣ることが示された (RR 0.95)。一方、単離された細菌別のサブグループ解析では、FQ 系レジメンと BL 系レジメンの間で有意な差は認められなかった。

以上の結果を踏まえ、著者らは「今回のメタ解析から、複雑性腹腔内感染症患者に対する FQ 系レジメンと BL 系レジメンの有効性と安全性は同程度であると考えられた。一方、モキシフロキサシン単剤療法については、わずかに有効性が劣る可能性が示唆されたが、今回のデータでは限界があるため、今後の検討が必要である」と結論。抗菌薬の経験的選択に際しては、その地域や箇所での細菌の疫学的状況や耐性パターンなどを考慮すべきだとしている。

- (1) メディカルカスタムコンテンツは、AJ Advisers LLC が制作、株式会社プロウエーブが編集 (編集協力 AJ Advisers LLC) した記事です。情報の正確性については万全を期しておりますが、各制作・編集社は、利用者が本記事の情報をを用いて行う一切の行為について何ら責任を負うものではありません。
- (2) 本記事の内容及びメディカルカスタムコンテンツのロゴの無断転載・配布を禁じます。
- (3) 掲載されている薬剤の使用にあたっては添付文書をご参照ください。